

## 中尾甚六（なかおじんろく）（1/2）

～鯨組の頭～

人と鯨の出合いは古代に始まったと考えられます。各地の古墳からの出土品や壁画など、市内の小川島でも縄文時代に鯨骨で作られたアワビ起こしも発掘されて、深いかかわりがわかっています。これらは古代の郷土の人たちの生活を知る上で、とても貴重な発掘であったといえます。

あの巨大な鯨を一体どうして捕え、人の暮らしに役立てたのでしょうか。古代には鯨に向うような船や捕獲の技術もなかったので、天敵のシャチ等に追われて岩場に乗り上げて動けなくなったり入江に迷い込んだ時に総がかりで捕える時代が久しく続いたものと思われます。

わが国での捕鯨はまず和歌山に始まり四国、九州と伝わり、その技術が玄界灘を通る鯨に利用されたのでした。

呼子では中尾、中川、生島氏等も操業しました。私たちの郷土は中国大陸や朝鮮半島と非常に近い関係で、海を渡っての往来は盛んで、海には大変馴れた人が多く、また、松浦党や倭寇の流れをくむ人たちも多かったので、数10年も遅れて操業したのに先進地を追い越してしまいました。

中尾氏は代々甚六を名乗り、主に小川島を根拠に東は長州沖、西は五島沖に及ぶ地域で、明治10年に廃業するまでの約170年間捕鯨を営みました。

唐津藩では、江戸時代中期以降に最盛期を迎えます。そのころ鯨組といえば近くから船や海に馴れたカジマンの若者が集められてあの大きな鯨に挑みました。その仕事ぶりは、親父船（総指揮者の乗った船）の采配で立派な働きをしました。この鯨組を動かすには、強力な指導力が必要でした。鯨は必死で逃げようとします。銚を何本もつけたままなので、船ごと海に引き込まれたり、鯨とぶつかって転覆することもあったのです。日没ともなれば、松明の明かりでの作業です。冬の季節風の強い玄界灘で、しかも猛吹雪や高波の中での仕事は地獄絵さながらの状態、大変な危険を伴いました。

初代甚六のときは突取法でしたが、江戸時代も半ばを過ぎると造船技術の進歩や捕獲の方法も網代に追い込む網取法が考案されて捕獲率も向上しました。

好況時のようすは今も残る広大な住宅跡やことわざでもわかります。「中尾様にはおよびもないが、せめてなりたや殿様に」、「鯨一頭捕れらば七浦潤う」とも言われていました。また、「婚礼用品を京都から一万両もかけて購入した」ことや道具等も残っていてそれを示しています。

～2/2へつづく～

分野 人物

地域 呼子

◎地図・写真・統計資料など



小川島

捕鯨のための見張り場「山見」は、中央の高台に今も現存する。とれたら直ちに呼子の本宅に早船で知らせ、それから唐津の藩主に早飛脚で報告していた。



小川島の山見

苦の上げ方や狼煙で鯨の種類や進行方向を示した。

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』  
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ  
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：  
[http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts\\_lib/index.html](http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html)

## 中尾甚六（なかおじんろく）（2/2）

～鯨組の頭～

～1/2からつづく～

三代甚六は五島の出身で往き来する時に長崎の旅籠呼子屋に泊まりました。この時に指導したのが長崎くんちの万屋町の潮吹き鯨で200年を過ぎた今でも続けられそれを縁に町と町の交流が最近始まりました。

鯨組は1組で約6,700人、船も40艘程は必要で、資材等含む年間費用は莫大なものでした。不漁の時は組主や勘定方はそれに心労しました。二代目甚六の時には借金の取り立てから逃れるために、握り飯をもって裏山に潜んだといひます。

また、次のような悲しい話も残っています。

ある日刃刺（はざし）の夢枕に親子連れの鯨が現れて、「今弁天様にお詣りに行っています。どうぞこの場だけはお見逃してください」と、命乞いをするのを目覚めた刃刺は急いで沖場に行くと、他の刃刺に既に仕止められていました。がっかりして家に帰ったら玄関先で娘の胸には捕鯨用具の剣が刺さって息絶えていたということです。悲嘆にくれたその刃刺は深い悲しみに発狂し、娘の亡骸を抱いて町中をさまよい歩いた末、海に入水して自らの命を絶ったということです。三代目甚六は、その鯨の霊を慰めるのに鯨1頭分の代価をあてて竜昌院本堂を建立したといわれます。（現在のものは再建のもの）現在、呼子町内には鯨の成仏を願っての供養塔が4基もあります。

ところで三代目甚六は、二代目甚六が借金の取り立てから逃れるために握り飯をもって裏山に潜んだ困窮時代を忘れないように、竜昌院の本堂の大屋根に握り飯をかたどった鬼瓦を掲げています。

分野 人物

地域 呼子

◎地図・写真・統計資料など



小川島捕鯨絵  
これは、柏浦の模様をかいたもの。同日に3頭も獲れることもありました。



竜昌院本堂の鬼瓦

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』  
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ  
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：  
[http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts\\_lib/index.html](http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html)